

うごけよつねに:モノをとおしてコミュニケーションを理解する

Stay mobile and carry on: On understanding communication through our use of artifacts

加藤文俊^{*1}

Fumitoshi Kato

^{*1} 慶應義塾大学

Keio University

The present study is an attempt to explore the notion of “mobility” through an experiential learning program. In Fall 2017, five groups of college students attempted to design a series of “mobile kits” for place-making activities. That is to envision and identify when, where, with whom, and how our “precious moments” will be realized. From a carry cart to a bicycle, each group tried to modify and redesign a range of selected items (vehicles) based on their own “issues” at hand. By referring to the process and outcome of the project, this paper begins a discussion about the ways in which we can speculate upon human communication behavior through understanding the use of artifacts/objects in our day-to-day activities.

1. はじめに

筆者は、ワツラヴィックらによるコミュニケーションに関する「試案的公理」を参照しながら、さまざまな実践の文脈における「場づくり」やファシリテーションのあり方に関心を寄せてきた。とくに「コミュニケーションしないことの不可能性 (One cannot not communicate)」という言明は、きわめて示唆に富んでいる [ワツラヴィック 2007]。私たちは、しゃべることをコミュニケーションだと考えがちだが、黙っていることも、さらに他の非言語的、身体的ふるまいもふくめて、絶え間なくお互いの状況を伝え合っている。つまり、私たちはコミュニケーションせざるをえないのである。さらに、私たちが日常生活においてさまざまなモノや道具を必要としていることから、モノの成り立ちやモノ自体をとおして、人びとのコミュニケーションの痕跡やありようについて洞察を加えることもできるだろう [原田 2003]。

本論文では、「うごけよつねに」というプロジェクト [加藤文俊研究室 2018] を事例として紹介しながら、モノ(移動体)をとおしたコミュニケーション過程を理解する試みについて論じたい。モノは、私たちのコミュニケーションの契機(始まり・終わり)となるばかりでなく、時間、空間の構成・再構成に関する身体的な理解の創造に役立つ。

2. うごけよつねに

2.1 モノをとおしてコミュニケーションを考える

私たちのコミュニケーション行動が、つねに〈いつか・どこか〉で実現することをふまえると、私たちのコミュニケーション過程は、つねに「場づくり」の問題と密接に関わっていると言える。私たちは、コミュニケーション欲求を満たすために集う。つまり、「場づくり」は、私たちのコミュニケーション過程で、絶え間なく空間、時間、情報を調整する試みである [加藤 2016]。一連の時間・空間の調整によって成り立つ「集い」は、ある一定の時間・期間を経て消失する場合が多い。それは、私たちがつねに「移動していること (on the move)」の証である [アーリ 2015]。私たちの移動性に着目すると、私たちが日頃は目的地に至るまでの「あいだ」だと位置づけている、通勤や通学の際に利用している電車の車両も、私たちのコミュニケーションの所産として構成されるひとつの

「場」であることに気づく。黙ったまま、お互いに干渉せずに電車に揺られていても、私たちは絶えずコミュニケーションを行い、車両にいる時間・空間を調整しながら過ごしているからである。

私たちが標榜する社会的な実践をともなう調査・研究プロジェクトにおいて、持続可能性が重要であることがしばしば指摘される。とりわけまちや地域に関わる活動の場合には、ある程度の時間をかけないと、その意義や意味を実感できないからだ。活動そのものが楽しいことも大切だが、筆者が過去の経験から学んだ「続けるコツ」は、できるかぎり身軽になることである。

これまで「ちいさなトラック」「引っ越しの準備」「爽やかな解散」「連れてって」など、つねに私たちの移動(移動性)に関わるテーマで、大学生(学部生)を対象とするフィールドワークのプロジェクトを実践してきた。そして、いまの状況からつぎの状況へと、すみやかに移動できることが重要だという点を体感してきた。いわゆる「心の準備」もふくめ、「モバイルでいること」こそが、絶え間ないコミュニケーション行動をかたどっているはずだ。こうした理解をふまえ、2017年度秋学期は、「うごけよつねに」というテーマに決めた。英語には、「Stay Mobile and Carry On」をあてた。

2.2 課題の概要

今回は、学部 1～3 年生で 5 つのグループを編成して、このプロジェクトをすすめた。筆者が、あらかじめベースとなる「車両」を準備し、それぞれのグループに提供した。キックボード、キャリーカート、電動アシスト付き自転車など、形もサイズも多様だ。いずれも車輪がついていて、そのままでも使えるので、いわばカスタムカー(改造車)をつくるようなものだ。

学生たちは、〈いつ・どこで・誰と・どのように過ごしたいのか〉という具体的な状況を考えながら、「場づくり」を容易にしたり、コミュニケーションを促したりする「モバイル・キット」のデザインに取り組んだ。そして、考案した「車両」は、かならず一度はまちに持ち出して、実践(フィールド・テスト)を行うよう促した。モノ自体は、多少粗削りでも、仕上げが雑でもかまわないので、とにかく教室や研究室に留めておくのではなく、リアルな現場へと「車両」を持ち出して、実践をとおして考えることを重視した。

学生たちは、ひとたび「車両」があたえられると、形や見栄えに意識が向いて、〈つくる〉ことが先行しがちになる。その結果、柔軟な発想が制約されることにもなる。そうした状況を避けるために、所与の「車両」によって、どのようなコミュニケーションが生まれるのかについて、つねに〈考える〉ことを忘れないよう促した。

連絡先: 加藤文俊, 慶應義塾大学環境情報学部, 〒252-0882
神奈川県藤沢市遠藤 5322, fk@sfc.keio.ac.jp

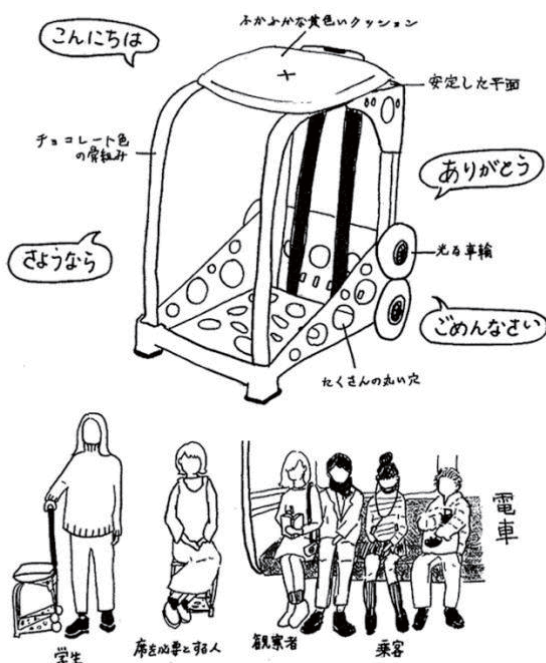
3. 経過: YUZÜROCAR

上述のとおり「うげよつねに」というプロジェクトでは、それぞれのグループがベースとなる「車両」を起点に発想し、「モバイル・キット」の提案を試みた。以下では、5つのグループの中から「YUZÜROCAR」の事例を紹介したい。

3.1 着眼点

「YUZÜROCAR」は、その呼称が示唆するように、電車等の公共交通機関等を利用する状況で、席を「ゆずろう」という想いを喚起することを目指している。このグループは、私たちが「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」「ごめんなさい」といったごく基本的な挨拶行動を忘れがちな点に着目した。挨拶行動は、他者の理解、関係性の表れであり、それは「他人への想像力」を喚起するという課題として位置づけられるようになった。つまり、私たちが日常的な挨拶行動を軽視したり、忘れていたりするのは「他人への想像力」が欠如しているからだという考えである。

3.2 デザイン



このグループは ZÜCA という少し変わった形状のキャリーバッグをベースとして選択した。ZÜCA は、金属の堅牢なフレーム構造が特徴的で、簡易なイスや踏み台ように利用することができる。実際にこれを携行していれば、(さまざまな制約はあるものの)座る場所に困ることはない。そこで、このキャリーバッグを「持ち運ぶことのできる座席」に見立てながら、私たちが電車に乗り合わせるという状況への介入を試みた。その中で、乗客たちに対して座席を譲る行動を喚起し、さらにその結果として「ありがとう」「さようなら」などの言葉を引き出そうとした。(図は同グループによるイメージ [加藤文俊研究室 2018])

3.3 実践

いくつかの作業仮説に基づいて、数回の社会実験を行った。電車で座席を「譲ろう」という気持ちにさせる状況は、他者が何らかの不便を被っていると感じたときであろう。言うまでもなく、外見は視覚的な手がかりになる。年格好や白杖、松葉杖等は、人

びとの状態を知らせる働きをするので、私たちが「他人への想像力」を喚起するきっかけづくりになる。当然のことながら、一人ひとりの不便や不具合は目に見えとはかぎらず、たとえば「マタニティマーク」のようなモノも、自らの状況を可視化し、メッセージを際立たせるのに役立つことが期待されている。

車両に空席がない状況で、この ZÜCA を座席として譲る状況演出した結果、居合わせた乗客が席を譲ろうとしたり、「ありがとう」「さようなら」といった声をかけ合ったりする状況を観察することができた。

4. 考察

4.1 移動という関わり

いささかナイーブな実験ではあったが、モノ(移動体)の役割を実態的に理解することができた。私たちの「居方(いかた)」は、モノを介して変容し、それはつねに「移動中」という状況にある。電車に乗り合わせる場面に限らず、他者との適切な距離や関係のありようについて考える際には、時間・空間のみならず、モノとの関わりをふくめて理解を試みることが重要であろう。

4.2 つくりながら考える・考えながらつくる

この課題は「考える」と「つくる」ことを往復しながら進行するように設計されていた。それは、コンセプトワークとフィールドワークとの橋渡しを担う、実験的な環境によって実現する [加藤 2017]。ここで言う実験は、統制群によって条件を操作しながら行う厳密な意味での「実験」ではなく、「即興の実験(on-the-spot experiment)」[ショーン 2007] や、プロトタイプによる試行のくり返しを伴う学習過程として理解することができる。「ある程度の一般性とかかなりの具体性を持った実践モデル」[西條 2007]を提示することで、私たちの想像力を育むものであった。

4.3 「つくらない」という選択

「うげよつねに」では、5つの試行実験が行われた。ベースとなった「車両」に手を加えて「モバイル・キット」をデザインすることが期待されていたが、試行錯誤を経て、ZÜCA は、ほぼそのままの状態が最終的な成果物の「形」となった。私たちのコミュニケーションや関係性の理解において、モノの役割を無視することはできないが、同時に、すべてがモノに集約されるわけでもない。まさにコミュニケーションの所産として、相互構成的に状況が立ち現れることを再確認するきっかけとなった。

参考文献

- [アーリ 2015] ジョン・アーリ: モビリティーズ, 作品社, 2015.
- [加藤文俊研究室 2018] うげよつねに (Stay Mobile and Carry On), プロジェクト報告書, <https://vanotica.net/smaco/>, 2018.
- [加藤 2017] 加藤文俊: 「ラボラトリー」とデザイン, SFC Journal, 17(1), pp. 110-130, 2017.
- [加藤 2016] 加藤文俊: 会議のマネジメント, 中央公論新社, 2016.
- [西條 2007] 西條剛央: 質的研究とは何か(ライブ講義), 新曜社, 2007.
- [ショーン 2007] ドナルド・ショーン: 省察的实践とは何か, 鳳書房, 2007.
- [原田 2003] 原田隆司・寺田伸悟: ものとなりの社会学, 世界思想社, 2003.
- [ワツラヴィック 2007] ポール・ワツラヴィック, ジャネット・ハベラス, ドン・ジャクソン: 人間コミュニケーションの語用論, 二瓶社, 2007.